



シャボン玉石けん訪問



グループワーク

初日の午前中は、学長への表敬訪問の後、本学生たちがガイド役になり、キャンパスツアーを行いました。大学構内にある大学・大学病院職員向けの保育園を紹介した際、未就学児童の育児サポートや学生同士でのキャリア形成における家族の考え方を語り合うような場面もありました。午後は、現在建設中の急性期診療棟を内覧しました。ヘルメットを被り、これから搬入される最先端の医療機材の説明を受けながら、建物の中を視察しました。この後、医学部生を中心に、医療人材の育成や教育制度などについてディスカッションする時間を設け、ウエルカムパーティーで初日を締めくくりました。

2日目は、稀な大寒波襲来で雪の降りしきる中をバスで移動し、糟屋郡粕屋町を訪問しました。粕屋町を訪問し、粕屋町の地域保健行政の取り組みを紹介してもらい、各国の母子保健、生活習慣病予防、高齢社会の課題などに対する公衆衛生の仕組

韓国・米・印から招へい
みんな違うで考える健康と福祉

韓国5名、米国4名(うち教員1名は自費)、インド8名(うち教員1名は自費)計17名を招へいし、全体を通して「『みんな違う』で考える健康と福祉」というテーマを設定し、交流を企画しました。日本と韓国については、隣国ということもあり相互の文化交流も比較的多いのです。しかし、この情報過多の時代でも、インドや米国について、友人でもない限り、関心を持って同世代の若者の生活の様子や社会情勢について知るモチベーションをもつ日本人の若者は多くはありません。日本や韓国は単一民族国家でもあり「皆同じ」を前提にした社会的規範が広く共有されています。一方、多様な人種や言語を話す人たちによって国が構成されるインドや米国は「皆違う」を前提にしています。今回の交流の目的は、このような根源的違いも含め、相互にどんなに違っているかを知り、その違いを受け止め合う機会となるように計画



河村 洋子
(産業医科大学
産業保健学部教授)

産業医科大学からの活動報告

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

Ⅱ 特別連載Ⅱ

プログラムスケジュール	1月22日	福岡空港到着 → 大浦ゲストハウスにチェックイン
	1月23日	学長他の表敬訪問、オリエンテーション、学内施設見学 建設中の急性期診療棟見学、医学部生との意見交換
	1月24日	粕屋町表敬訪問(行政保健等の取り組み) 我が国の健康福祉に関する制度の概要と現状および課題 (産業保健学部教員の講義と意見交換)
	1月25日	産業保健・産業医学の課題と現状(禁煙支援、メンタルヘルス) (産業生態科学研究所教員の講義と意見交換) 柳安川電機、シャボン玉石けん(株)を訪問
	1月26日	ジャック・シムズによるトイレの課題の講義 TOTOミュージアムを訪問、北九州市環境ミュージアム視察
	1月27日	学生発表の準備 学生の学びの成果報告会および総括
	1月28日	福岡空港に移動、出国



プログラム修了式後の記念撮影

みについて知り合う有意義な時間となりました。午後は本学の3名の若手教員から研究を紹介し、相互に意見を交換する時間をとりました。いずれに対しても関心が高く活発にディスカッションをしました。

3日目は産業保健に焦点を当て、午前中は職域保健でも重要な課題の一つである禁煙対策について、本学産業生態科学研究所健康開発科学の大和浩教授から講義を受けました。講義後も活発にディスカッションし、その中で各国の比較によって、我が国の禁煙対策の遅れも浮き彫りになりました。午後は地元企業を訪問視察しました。まず、安川電機(株)で最先端のロボットの製品の製造過程を見学し、技術の開発の歴史を学びました。日本の「ハイテク」というイメージをそのまま表現し、体感できる展示施設で各国の学生たちは大興奮の時間を過ごしました。

その後、シャボン玉石けん(株)を訪問しました。北九州市のみに工場がありながら、世界に輸出される無添加石鹸や関連商品について製造の過程の説明を受けた後、工場で石鹸として製品になる過程を見学しました。また、ロジスティックを司る配送準備のための拠点倉庫を見学し、省スペースで効率的な仕組みに対して皆感嘆の声を上げました。

最終2日間は「トイレ」に関するワークシ

ョップを行いました。まず、世界トイレ協会会長であるジャック・シムズ氏によるオンラインでの講演を聴き、「トイレ」にまつわる課題がいかに多面的かを共有しました。インドからは最近もトイレに関して社会的な問題としてメディアに取り上げられてきていることなども紹介してくれました。午後には、地元企業であるTOTOMIミュージアムを訪問し、トイレの歴史などについて学びました。

翌最終日に、3つの日韓印米の学生混合チームがそれぞれの国のトイレに関連する課題を取り上げ、その解決策を提案するワークの時間をとりました。いずれのチームも短時間で問題を考察して、改善・解決策を提案しました。

締めくくりの修了式の際には、本学・産業保健学部の中富満城准教授が能について説明実演しました。インドの学生・教員はインド国内の各地のドレスを纏い、各地域のダンスを披露しました。宴もたけなわの中、修了証を授与し名残惜しい雰囲気の中でエターニティ・サークルを作って一言ずつ感想を言う時間をとりました。

全体を振り返って、活動を通して各国における課題がいかに社会や文化と結びついているかをしっかりと共有できました。そのような経験を通して、「違う」が当たり前で、それを認め合うことで相互理解が進むということとを体感できる良いプログラムになりました。

一緒に交流した

日本の学生への教育効果

今回のプログラムには、学年も異なる2学部3学科の学生たちが参加しました。その中で、特にほぼ全プログラムに参加し、海外学生たちとの時間を満喫した看護学科3年生の数名の学生は特にLife Changingな経験をしたようです。最終日間近の合間で、「先生、本気で留学したくなりました。いつしたらいいのでしょうか」と尋ねてきました。卒業後は看護師になるけれども、いつかは海外で学んだり、仕事をしたりしたいという想いを語ってくれました。

「トイレ」をテーマに合同グループで取り組んだワークショップでは、健康だけではなく多面的な社会課題があることの認識が共有できたようです。言語の壁を乗り越えて、考えや想いを伝える過程で、チームビルディングが進み、トイレに関する課題だけではなく、様々な観点での違いと共通点を感じ取るという学びの経験になったと感じています。これは、最後のエターナル・サークルで一言ずつ感想を共有した際の学生だけでなく、サポート役の教職員の表情からしっかりと得た実感です。